国木田独歩の佐伯での生活（十一）

山内武麒
（賛助会員・佐伯市山手区）

十二月の記について書く。

一日の記には

愛と信と、これ実に人間の命にして人間の智識なる可し。

しかし自分はまだ一度もこの愛を痛切に深く感じることが出来ない。天地の愛はどこにあるか。自分は未だ大きな信仰に入ることが出来ない。たゞ迷っている。

と、自己反省をして

自分は人間と生れてこの世に住み、この時代に遇い、予期しないこの境遇をうけている。

自然、この高遠で沈黙し、無限、偉大、微妙であるこの周りのこの自然、これは何か。

と、今の自分を省みている。

この頃、ウオーズウオースの逍遥遊を毎日読んでいる。

そして次に、

二十九日の薄暮、独り櫨の路を散歩せり。天曇りて晩鐘雲にこたへ、村暗ふして燈未だ點せず。寂莫と里声とは吾をして感慨に堪へざらしめぬ。

と、記し、次にまた自己反省をしている。

自分は決して真面目でない。まことに嘆げかわしい限りである。考えてみよ。もう今は軽薄に考えたり、行動したりする時代ではないのである。よく考えてみよ。自分の心の底の煩悶と不真面目とをきれいに消し去ることを信じ得るか。自分は決して真面目でない。苦しまない信仰もうすい。智識もない。心から感激することがない。

と、自分の不甲斐なさを自責している。独歩はこのように常に自己反省を繰返し、向上をめざしていた。

五日の記には

二日と三日と四日とは過ぎ去りぬ。

二日は土曜日、三日は日曜日、土曜日の夜ー鹿狩りに誘はれ、弟と吾と合して十名、桂港より乗船して猿渡と稱する浦前に着き、明くれば日曜日、終日野山に狩り暮し其夜は猿渡に宿し、四日朝、吾等五名は陸地より徒歩佐伯町に帰る。

と、ある。

猿渡は鶴見半島の中浦湾の北東側にある小部落である。昔、この鶴見半島には猪や鹿が多く住んでいた。猟師たちのよい猟場であった。旧藩時代には畑を荒らすのを防ぐため、山の尾根伝いに長く石垣を作ってあった。その跡が今もある。

この記は小説「鹿狩」のヒントとなっている。独歩が二十八歳の時の作で、明治三十一年八月発行の雑誌「家庭雑誌」に載った。

この作には今井の叔父の性格、明朗でユーモアの人であることがよく書かれ、ユーモアに富んだ人間性に対する独歩のあこがれを察することが出来る。

次に、人間とは苦しい者であるのか。この不可思議な自然と測ることの出来ない法則とによって支配せられ、自分自身の生存している意味を知ることが出来ない。しかも知ることが出来ないでその一生を安心して送る者が多いのはいよいよ不思議である。

星斗燦爛たり、朝日輝々たり、白雲漠々たり、人事悠々たり、生活擾々たり、愛情脈々たり。五尺の身体厳然たり。無限の時間、空間の無辺なるが如く然り。而して其の何の意たるを知らざる也。而して知るも知らぬも畢竟終に何の差別あるか其れすら知らざる也。

と、人間の悲しさを取り上げ、この苦しみを救うのは、「只だ信仰のみぞ此苦煩苦悶を救ふ」と、信仰を望んでいる。

多くの人々はこの世に生まれ、実に種々様々な想像も出来ないような色々な生活を送っている。これは事実である。

頼朝は今は居らない。しかし嘗ては確かに居たのである。同時代の人々、北條時政も梶原景時も今は居ない。しかし嘗ては確かにこの世で生活していたのである。そしてこの自分も今この世に生れて生活している。これもまた大きな事実である。

嗚呼茲に於ける生活！　茲ー　生活。ここに於てか凡て此等の言葉意味深き言葉となる。

と、この世に生れた人間の現実の生活には大きな意義あることを説いている。

七日の記に

詩人は円く想像し、俗人はひらたく想像する。ひらたく想像す故に窮し迷ひ、失ひ、而して遂に達せず。円く想像す。故に達せずと雖も窮せず、窮せず茲に迷はずして自ら通ず、則ち達したる也。円き想像には必ず中心あり。否中心自らあらはる。之れ神なり。故に大なる詩人は神をみる也

と、ある。面白い見方考え方である。詩人はものごとを円く想像するので窮せずして何時までも活動をつゞける。それと生気があり、その信仰は火の如く燃え、その情は泉のように流れ出るのである。と理想の詩人像を画いている。

八日の記には

歴史の考究の分量未だ未だ少なきが故に人類の命運に於けるビッドリー（ありありとはっきりした）の想像未だ吾が心眼の中に来らず。

と、歴史研究の浅いことを悔い、

それだから自分を人類の一員として感ずることがうすい。十九世紀の気運傾向をよくよく考えることが少ないから、これが自分の命と大きな関係あることを深く感じることが出来ない。天地自然な微妙な動きや呼吸を詠嘆した先哲の著述を味うことが少ないので、自分自身をこの大自然の中に見出すことがうすく浅い。まだ実際の人の生活や情や涙や運命と直接関係したり実際によく見ることが少ないので、折角考えたことも見たことも空想から免かれない。しかしこれは自分だけの欠点ではない。多くの者の欠点である。たゞ自分はそれを深く感じるだけである。

と、自分の浅はかさを反省している。

希望なくんば人は一分一秒も其の生命を続け能はぬなり。而して神の信仰と永遠の命の確信となくんば希望遂に立つ可からず

と、希望あって人生があると説き、

余は人間の死後只だ土塊青苔の待つあるよりも、寧ろ地獄の存在するありて其の中に投げ込まれんことこそ望ましけれ。一言すれば人間は、永久滅せざる活動

希望、愛情、進歩の連続ならんことを希ふ。

と、永遠の生命に生きようと考えている。

九日の記には

大なる信仰、大なる詩想は人類的主観より来る。

と、書き出して人類的主観ということについて書いてある。

宇宙がどれほど無極であろうとも、自然がどれほど幽遠で不可思議であろうとも、人類的主観からでなければ真の信仰も希望も起らないのである。

厭生思想は人類的客観から起こる。

われらは人類である。結局人類として内から見るより外はない。客観は一時的なものである。

人は人として内から自然を観、その法則を観、また人間の歴史を観、人情を観るのである。

科学者たちは人間を客観し人間と自然との関係を客観し、天地自然を客観する。たゞ客観するだけである。彼らは自然と人類との関係の外側に立って批評し、自分が一人の人間であることを忘れている。

嗚呼人類的主観！　天地始めて美に、愛始めて愛、善始めて善、生始めて永遠、死者死せず。

大なる自然は能く人間をして暗然として自身の空影を顧みて泣かしむ。されど人類的主観は此の苦しき涙より救ふ也。

と、人類的主観こそ、人間永遠の生命としている。

独歩はこの記の中でこの「人類的主観」という言葉をよく使ってある。その意味はよく了解出来ないが、哲学的に解釈すると、宇宙の本体として唯一絶体の精神即ち大我を云うのではないかと考えられる。個人的な狭い見地から離れて、自由な広い見地に立って物を見、考えることだと考えられる。

十二日の記には

今は十二日の夜已に十二時を打ちてやゝ過ぎぬ。

と、書き始めて、十日の日曜日に堅田方面へ遠足したことを記してある。

この日の朝九時頃家を出てあちこちの山谷に数多の村々を訪ねた。その村落の名はまだ一つ一つよく知らないはじめは船頭河岸から渡し舟で渡って堅田道に出て、右の方に折れて数村を訪ねた。久部・長瀬・大内・龍護寺

と訪うたのであろう。そして番匠川と山の麓とが相接しているところに行って道に窮して引き返した。龍護寺で道に窮したのであろう。あと返ってまた堅田道に出て柏江へ行き、なお進んで下堅田村（泥谷であろう）に出てこゝで大道（県道）に遇い帰路についた。

と、ある。そして次にこの遠行で観察したこと、感じたことを記してある。

観得たる処何事ぞ。

即ち大塊の上に人間が生死するまのあたりの事実なり。生活の実際のかたちなり。

嗚呼さまざまの村にさまざまの人は住みなん。其浮沈如何、其一生の命運如何、其感情如何、其の高尚なる人情は如何。

吾は如何に村落の民ならぬ乎。吾が人生観、宇宙観は村落の民と何等のハーモニイをたもつ乎。

と、訪ねた村々に温かい同情の心を寄せている。

あゝどうか自分にこれらの村をしばしば見舞わさせてくれ。そこは人間の活きた生々しい印象を自分に与えてくれる、新しい面をもっている村落である。

村の中には罪もあるであろう。恋もあろう。こみ入った煩わしい話もあるであろう。しかしこの村で生死する村人たちよ。自分にその生死する人たちを心ゆくまゝ観察させてくれ。

と、村々に強くあこがれている。

次に想像について記してある。

円満で豊富な想像をしようとするならば、歴史を愛読しなければならない。そして人類の生滅浮沈の運命を考えることである。そしてまた村落の民衆をよくよく観察することである。そして普通人の人情の上に人生の真理を見出すことにつとめるべきである。偉人の跡をよく見ることは人を観る上に甚だ有益であることに相違ないがまた村落のことを観察しなければ折角の高遠な詩想も実際の人々から離れた空想と同じであろう。そして、

嗚呼想像は常に吾をして躍起せしむるなり。又た暗然たらしむるなり。又た安泰の思ひあらしむるなり。想像よ々々汝の妙なる翼は何処までも吾が心の宮を見捨つる勿れ。

と、想像の大切なことを教えてある。

昨夜水谷真熊君から手紙がくる。上塚秀勝君の結婚のことを報せてくる。今日返事を出す。今日石崎ためさん

から手紙がくる。すぐ返事を出す。石崎ためは石崎家の四女である。

先達徳富氏から手紙がくる。その中にこれは松陰神社に詣でた際記念に取って帰ったものであること、わざわざ紅葉を二枚送ってくれた。また写真も送ってくれた。

徳富蘇峰が山口県萩の松陰神社に参詣した時、記念に境内の楓の葉をとって帰られ送ったのであろう。独歩は少年時代を山口県で暮したので、吉田松陰の大の崇拝者であった。このことは蘇峰は知っているのでわざわざ送ったのであろう。

次に、

円満なる人類的主観こそ、円満なる人類の宗教なれ

兎も角も、古来哲人詩人の高遠幽妙なる思想感情、信仰もせんずる処、人類的主観の高きなり微妙なる也と、人類的主観こそ最高のものであると説いて、最も豊富で適確な想像こそ最も気高い人類的主観を作るのである。希望的な人類的主観は、人の煩悶や失なった意識を救うものである。ウォーズウォースの如きがこれである。

そして

然り吾をして此の大主観に達せしめよ。

吾未だ達す能はざる事至って遠ふし。小イゴーの漂流の浅間しき哉。

と、自分はこの大主観に達するのにほど遠い。一日も早くこの境地に達したいと熱望している。

十四日の記

昨夜は失望せり、自棄せり、放擲せり、以て自ら苦しみたり。

と、記して、これはすべて愚の至りである。馬鹿の極みである。と、反省し

どうして失望したのか、失望するな。一個の独立し自立している星ではないか。自分は自分である。あくまで自分である。失望したとて自分自身が消滅しない。生れなかった昔に帰るのでもない。善人であるとしても、悪人であるとしても、また何事も出来ないものであるとしても、何であろうと、自分はこの天の下空の上に生れ出てこの世に存在すべき運命を負うた一人の人間である。だから

決して失望自賤する勿れ、自失自悶したればとて人間たる運命が消滅するに非らず。

と、自分自身に呼びかけ自奮している。

永久に滅せない地獄の火もおそれるに足らぬ、おそろしいのは自暴自棄の馬鹿な振舞である。石川五衛門であろうと自分を棄てるな。棄てるのは愚の極みである。人には決して自分を棄てる権利はない。自己を決して棄てゝはならない。生れなかったものは空である。確かにこの世に生れた者は、馬鹿であろうと、賢人であろうと、大悪人であろうと、大善人であろうと、みな空ではない。確かにこの世に存在している。みなこゝに生存している。これは自分から欲したことではないが、自分を棄てる権力はどうして人にあろうか。自分を棄てると思うものは実に馬鹿の骨頂である。のんびりと暮すべきである。

と、反省し、自己の存在の事実を充分認識してその意義を認め、自暴自棄になるような愚の骨頂をするなと自ら戒しめている。

十七日の記

近来天甚だ寒く、月漸く冷なり

朝な朝な起き出でゝみる冬景色

と、この頃、十二月中旬の漸く冬景色らしくなったことを記して、

毎日ぶらぶらとして何も為すことのないこの頃。なすことはないと云っても、為そうとする熱情は益々燃えてくる。

昨日生徒にナショナル第二を教えていた時急に自分をふり返っておかしくなり一人笑いをした。この朽ちる命で何をしようと考えているのかと思って。ところが、

今朝めざめて頭を挙げてガラス越しに灘山の背後朝輝の天に漲ぎるを望む、忽然として感ずらく、嗚呼、大なる美なる確かなる此自然、吾は人なり、爾の中に生く、爾老ひず、吾豈に老ひんや、吾あに死せんやと。

と、大自然の壮観に目覚め、昨日一笑いをしたことを悔いている。

自然は一つで変りない。古来幾億の生命をこの自然が呑吐したのである。自分も人である。安心せよ。自分の独立を感じる。自分のソールの独立を強く感じる。

要するに自分のソールをこの自然の中に見出すのである。

ソール、ソール、ソールは自由であり、自然であり、独立しているのである。

と、自分のソール（霊魂）の独立を信じて強く自覚している。

午前教会堂に出席し、夜も出て感話した。

午前の教会からの帰り道に城山の後をめぐって帰えり例の坂を越えた。杉の森の下の陰を通るとき、「自然」の動かないことを強く感じ、自然が自分に親しく近づいたことを感じた。

十九日の記

昨日の朝起きて著作の筆をとり始めた。今井忠治君から手紙が来る。すぐ返事を認めた。その中に書いた、よかれ悪しかれこれだけは是非とも成し遂ける積りであると。今朝から初めた著作のことである。

教場に出て授業をすることいつもと同じである。夜、夜業を終って月光を踏んで帰宅した。その帰途に次のようなことを考えている。

自からの生存の偶然を感じ、吾が生れし時代の終に亦た過ぎ去りて吾も亦た吾が自から古代を思ふ如く未来の人々より回顧せらる可き命運の輪転の不思議の事実に打たる。

と、果敢な一生を考えたが、しかし、自然の美の神の呼吸であって時の裏には永遠がある。だから神のもとにある自分は亡びないのである。過去の豪傑達も山間に住む樵夫たちの一人も亡びずにあるのである。厳然としてある。死の裏は生である。と、永遠の生命を信じている。

次に今日のこと、

今朝早く起き出でゝ冷水もて体を拭き、雪の如き霜を踏むで櫨の道より老松の馬場を散歩す。

今日たゞ学校のためにいそがしかりし。

と、記してある。

二十日の記

今朝起き出て窓を開けて眺めると、空には雲が立ちこめ、元越山の谷々は靄が集って空気はしめっぽく地面には水溜が出来ていた。

昨夜眠ろうとする時雨が軒にあたる音を聞いた。夢の中に大雨が降ったのである。久しぶりの雨で凡てものがよみがえった。

今朝著作の筆をとった。「五月三十日の記」が少し出来た。そして

直ちに収二と共に散歩に出掛けぬ。例の如く城山を

めぐらんと志して行きぬ。例の八幡の社に来り見れば笛と太鼓の音森の中にきこゑて二流のはた鳥井の外に老杉の傍に立つを見たり。此時雨ふり居たり。

と、白潟の八幡社のお祭りで神楽が奉納されていたのである。

そして岡の谷の坂を越している。その景色を次のように叙してある。

例の谷を越ゆ、雨にしめりし空気、山谷の翠気と合ひ、得ならぬ香、傍のしげみより起りて面を払ふ。雲忽ち破れては光箭の如く流れ下りて林、谷、峰にみち雨に湿ひし樹葉俄かにきらきらとかゞやく。かゝる時に此坂越ゆるを得る人は都の町を雨に追はれて走る人にくらべて幾倍の幸福なる哉。

坂を越ゆれば例の谷間に出づ、忽ち山のかなたに音す、吾の曰く啄木鳥なりと、耳をすまして聞けば伐木下々山更に幽かなり。又々光雲間より落ちて前山の半腹を流るゝ如く走りゆく。

と、雨後の岡の谷の情景を筆巧みに描写してある。

しかし、これらよりも美しいのは元越山の靄である。木立山の靄である。或時は全山焔のように燃え、或時は一すじの火花が谷の陰から立登り、或時は山の半腹に火山の破裂したように火焔を吐き、怪物の如く天の宮の如く変幻する様子はまことに美観である。

雨、水蒸気、山岳、光線、白雲、青空、美なる哉これ等の配合融混の妙や

と、結んである。

自分は自分の心を信ずるなり。これ人類を信ずるが故なり。而して人情を信ずるなり。

と、自分は人の心と人情を信じている。であるから自分の心に感じて美と思い真と思ったことは、きっと神の美と真との幾分かを得ているものと信じる。自分の心も聖人や哲人の心と左程ちがっている筈はない。いや等しいと信じる。自分は決して自分の心のはたらきを賤しんだり冷笑するような馬鹿の骨頂や不道理なことをしないよう注意せねばならない。この点でエマルソンの自信論は真理である。彼の云う句の意味を知った。

自信とは、人類の心を信ずることなり、これ自分発明の句なり。人類的主観に自分の信仰を置くならば、自からの自然の心を信ぜよ。愛は愛、善は善、悲しみは悲しみなり。豈に他ならんや。

己に自から信ず、信じたる心は迷へる人を教ゆるを得る也。

信ぜよ、々々々、人類の心を信ぜよ。真理は人類の心の信仰を除ひて他あるなし。

と、自信をもつことを強調し、人の心、人情を信じることそ自信であると説いている。

二十一日の記には

人若し吾に向って汝が文学者、詩人としての目的は何ぞやと問はゞ、吾答ふるに窮せざる也。

と、自問し、その答を次の二十二日の記に書いてある。

二十二日の記

然り自分は其答に窮せざる也

然り然らば何と答ふ可き

と、書き出してその答を述べてある。

自分は一個の人間である。自分は天から授かった独立したソールの上に立っている一つの独立した星である。自分が詩人として、また文学者としての職分は、此の独立したソールを知ることが出来るだけ、観得るだけ、また感じ得るだけをありのまゝに筆にのぼすことである。

たゞこれだけでその先は問わない。何故なら自分が果して独立したソールであるならば、その観たところ、感じたところ、知り得たところはみんな神の黙示するところであるからである。だから他の人に何かの教えをたるゝことが出来るからである。と、答えて。

然り余は独立にして自由なる一個のソールなり。将に自由に観、自由に感じ自由に之を現はす可し。

余は感じ得る人間天稟の心を有す。余は知り得る独立のソールを有す。然らば其他は問はずして可なり。

余は余自らを信ず。之れ神を信ずる所以なり。人類を信ずる所以なり。人性人情を信ずる所以なり。

と、自分は詩人として文学者としての天稟を持っている

と、自信たっぷりである。

佐伯は昨夜より祭日也、五所大明神の御祭なり。

臼坪村は昨夜より休息に入りぬ今朝は又た綿うつ音も聞へず、臼つく男も見へす、外見衣着(よそゆき)たる若衆村女の徘徊するを見るのみ。

昨夜の月光の清くして澄みたるは最も幸福なる田舎の祭の光景をそへぬ。

多の情話は各家の爐辺に起りたるなる可し

と、これは五所明神の冬祭りの風情である。旧暦十一月十五日にこの祭りがあった。この祭には昔佐伯の各家々では甘酒を作って祝っていた。それでこの祭りを甘酒祭と呼んでいた。祭りが近づくと各家庭では麹を仕入れ、飯を炊いてその中に麹をまぜはんど（大瓶、佐伯方言）に入れてれんぎでよくつき混ぜて二三週間寝かせておくと、甘くおいしく甘酒が出来る。これをうすめて沸し、熱いのをフーフー吹いて飲む。寒い晩には最適の飲ものであった。

祭りの日は町中総休みで、明神様に詣でゝ綱切り神楽や湯立て神楽を拝して喜んでいた。現在この祭りは十二月十五日に行い、なつかしい甘酒は米の統制以来廃れてしまった。

二十四日の記には

明日は佐伯を去らん、今年佐伯を見るは明日が最後ならん、明日汽船に乗じ帰省の途に上ぼり今年の最後の日は父母の膝下に送るべし、

今夜が今年佐伯に筆とる最後なる可し。

今夜月明らかにして感慨に堪へず、言ふに言はれぬ悲壮の感胸に充ち来るなり。

と、ある。明二十五日から冬休みに入るので、父母の住む柳井に帰省して、今年を送り新らしい春を迎えようと考えている。今年で最後の佐伯の夜、色々と感慨に耽っている。

あゝ美しいこの自然、静かなこの自然、偉大なこの自然、自分はこの自然の懐の中で、生れ、そして死ぬので色々とうろたえ大騒ぎしている。自然はこの自分をどうしようとするのか。と案じながら、

吾は吾が心を信んぜん哉

人間の心を信ぜずして如何にして希望あるべき。

嗚呼独立の霊終に為すなくして終はる可けんや。

と、思い直し、自信をとり戻している。

自分は自分を信じる。だからまた他人を信じる。等しく人類であるからである。自分は人類を信じる。故に自分を信じるのである。

自分を信じるから失望しない。他人を信じる。だから教えを受けることを望む。自分がウオーズウオースを読みその他から大いに学ぼうと希っているのはそのわけで

である。しかし自分が信じ、学びたいと考えている人たちはたゞ聖賢の人たちだけではない。普通の人である。普通の人の人情であり性格である。

自分は観ることが出来、感じることができる。その観また感じたものは人間のまごころを通じて神に達するものである。

と、自己自身を信じるこそ神に通ずるものと確信している。

明月、茅屋、細波、水門、漁村、水夫、農民、山谷、旧跡、陋巷、みんな自分の詩料である。悉く人情の幽音を保つ蓄音機である。

次に

明治二十六年将に逝かんとす。然り今此筆採る時は二十六年十二月三十一日午後十一時三十分なり。然からば、余す処三十分のみ、然り、分又た分、吾が此筆の進むにつれて明治二十六年は已に逝きなんとす。嗚呼二十六年爾去れ、二十七年爾来れ、吾が二十三歳は去り、二十四歳は来らんとす、二十四歳来れ、吾が希望の尤も盛なる二十四歳は来れア、二十四歳、吾に取り如何に重要の齢なる哉吾これを予言し得る也。

と、ある。十二月三十一日の夜中に筆を執っている。これからの記はこの晩二十六年から二十七年と越年しているのである。

この記は越年の感である。波瀾多かった二十六年は去り、二十七年を迎えるに当り、来年こそは大きく希望をふくらまし、胸の中にみなぎっている。感慨一しお深いものがあったであろう。

受贈図書(二)

玄　奘　三　蔵　鎌田守雄氏

玖珠郡史談第十六号　玖珠郡史談会

民具マンスリー十八巻　一一、一二号　日本常民文化研究所

歴史手帳十四巻　五、六号　名著出版